

シュマッハー Ernst Friedrich Schumacher (1911–1977)

『スモール イズ ビューティフル』1973年刊

本書は、ドイツ生まれの経済学者、哲学者であり実践家でもあったシュマッハーが、適正技術の概念を「中間技術」として先駆的に打ちだしたものとして、適正技術関連の文献の中でも、もっとも重要なものといえる。シュマッハーは、その生涯で三つの著作を残しているが、本書はその中の最初の著作で、1960年代初め～1970年代初めの講演や論文を素材としつつ、新たに書き下ろされた論考を加えてまとめられている。第二作の“A Guide for the Perplexed”(邦訳「混迷の時代を超えて」)は唯一の書下ろしであるが、宗教色・哲学色が強く、第三作の“Good Work”(邦訳「宴のあとの経済学」)はアメリカでの講演集である。

本書では、まず、資本主義、既存の経済学、既存の開発援助に対する根源的な批判が展開されるが、それとともに、それらの既存の体系に対する代替案が提出されている。

資本主義や既存の経済学への批判としては、一般に流布している「生産の問題は解決された」、「豊かになれば平和になる」といった議論を「神話」として批判しつつ、再生可能な資源と再生不可能な資源を区別しないこと、自然の許容限度を超える汚染・排出がなされていること、格差と貧困を生み出すこと、土地・水・大気・自然・環境等の超経済的な価値が無視されていること、仕事の意味が失われていることなどがあげられる。

既存の開発援助に対する批判としては、二重経済と格差を助長すること、発展のプロセスを無視して結果だけをいきなりつくりだそうとすること、先進国のノウハウを直接持ち込むこと、雇用を生み出さないことなどがあげられている。

それらに対する代替案の中核をなすものとして「中間技術」が提唱されるが、途上国開発を念頭に、いかに効果的な援助を行うか、という関心でなされた定義と、近代科学技術がもたらす環境破壊、資源の浪費、人間疎外などの問題を念頭に、それらの問題をいかに乗り越えるか、という関心でなされた定義の二種類の定義がなされており、それは、その後の適正技術(あるいは代替技術)に関する活動や議論の二面性にも対応している。

代替案としては、それ以外に、人間とその教育、組織、規律を重視し、仕事の機会を生み出すことを第一の目標とし、都市と農村の間に適切な均衡を取り戻す、セクター横断的な援助のあり方、あらゆる学問分野の中心をなす根本的確信・観念・思想を重視し、収斂する問題だけでなく、拡散する問題に向きあう教育のあり方、集権化と分権化の対立を守り、整然とした秩序と同時に雑然とした創造的自由をめざす組織のあり方などが、多面的・総合的に論じられている。

(田中直)

[書誌データ]

Ernst Friedrich Schumacher, *Small is Beautiful: a Study of Economics as if People Mattered*, Blond & Briggs, London, 1973 (『人間復興の経済』斎藤志郎訳、佑学社、1976; 『スモール イズ ビューティフルー人間中心の経済学』小島慶三・酒井懋訳、講談社、1986)

[目次]

第1部 現代世界

第1章 生産の問題

第2章 平和と永続性

第3章 経済学の役割

第4章 仏教経済学

第5章 規模の問題

第2部 資源

第1章 教育—最大の資源

第2章 正しい土地利用

第3章 工業資源

第4章 原子力—救いか呪いか

第5章 人間の顔をもった技術

第3部 第三世界

第1章 開発

第2章 中間技術の開発を必要とする社会・経済問題

第3章 200万の農村

第4章 インドの失業問題

第4部 組織と所有権

第1章 未来予言の機械？

第2章 大規模組織の理論

第3章 社会主義

第4章 所有権

第5章 新しい所有の形態

結び

(目次は、『スモール イズ ビューティフルー—人間中心の経済学—』小島慶三・酒井懋訳によった)